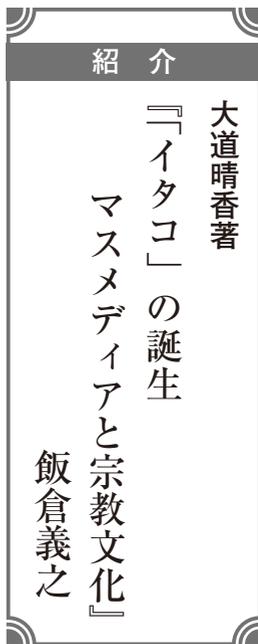


國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 大道晴香著 『「イタコ」の誕生
マスメディアと宗教文化』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯倉, 義之, Ikura, Yoshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000379



「イタコ」は現代日本において、地域の文化と深く結びついた語である民俗語彙の枠を越えて、広く世間に共有される一般語となっている。しかしそれはそもそも特異なことなのだ。「イタコ」とは、青森県と岩手県・秋田県の北部で活動してきた、祈禱・託宣・口寄せを業とする、盲目・弱視の（主に女性の）民間宗教者で、当該地域の生活者の外には知られるべくもない職業であったし、固有名詞であったはずなのだ。

現在の一般語となった「イタコ」のイメージは、死霊を我が身に憑依させて死者の言葉を生者に伝える霊能者の老婆、といったものであるだろう。本書はそのような「イタコ」のイメージがいかにして創出され、世の中に広まっていったかを、「大衆文化の中のイタコ」という視座から、フィールドワークと同

時代の文献調査を通じて丹念に追っていく。

地方に秘境や現日本を求める観光の欲求や、神秘・オカルトを渴望する商業メディアの注目、シャーマニズムの一類型として民俗宗教文化的価値を付与する宗教学・民俗学の学術言説が相互に作用しつつ、「イタコ」を北東北地域の生活文化に根差した宗教者／宗教儀礼の文脈から引きはがしつつ、土俗と神秘を背負った原日本を象徴する存在^{トポス}「キャラクター」として定着させていく過程が、恐山という場所と共に詳細に論じられている。本書は単なる「民間宗教者のメディア表象論」に留まらず、「民俗文化とマスメディア表象の現在」を問うためのモデル、教科書としての役割も担える好著である。

教科書的な本書には、それだけに積み残した課題もあると思う。それはインチキ・詐欺師・靈感商法等の言葉で糾弾されたり、雑誌やテレビ番組等でパロディとして演じられたりすることで、侮蔑されからかわれてきた、イタコ文化の矮小化の側面である。悪意の演出やアンチの出現などのメディア表象の暗黒面についても、大道氏の二の矢を期待したい。

(A5判、四二四頁、弘文堂、二〇一七年三月発行、定価四五〇〇円＋税)